NHK2010年大河ドラマ「龍馬伝」スペシャル対談

龍馬と白洲次郎
――危機に生まれる人物像

「白洲次郎」に続いて坂本龍馬をドラマ化するNHKチーフ・プロデューサー鈴木圭氏と、「白洲次郎」原作者・北康利氏が、今日的龍馬像を語り合う。

鈴木 圭 NHKチーフ・プロデューサー × **北 康利** 作家

NHK大河ドラマ『龍馬伝』で福山雅治が演じる龍馬（右）と香川照之演じる岩崎弥太郎。2010年1月3日より放送開始

北　鈴木さんとのお付き合いは、私の『白洲次郎　占領を背負った男』が鈴木さんプロデュースでドラマ化されたのがきっかけでした。今度は大河ドラマで『龍馬伝』を制作されるわけですが、演出も『白洲次郎』のときと同じ大友啓史さんということで、大変楽しみにしています。

『白洲次郎』は、戦後の占領という屈辱的環境の中でも、白洲次郎のようなプリンシプル、すなわち美学を持ちながら生きている人は毅然として生きることができるということを、伊勢谷友介という、我々からすると比較的新鮮な役者を起用し、感動的な映像でドラマ化していただきました。

そして、次に坂本龍馬を取り上げられるというのは、実は大変な驚きでした。

というのは、私が白洲次郎を書いたときに念頭にあったのが、実は坂本龍馬だったからです。もっと具体的に言えば、司馬遼太郎先生の『竜馬がゆく』ですね。

いまの若い人たちに元気を与えられるような人物がいないだろうかという思いが私の中にずっとくすぶっていて、『竜馬がゆく』を初めて読んだときのあの震えるような感動を、誰かを通して再現できないだろうかと考えたとき、脳裏に浮かんだのが、私の故郷である兵庫県三田（さんだ）市をルーツとする白洲次郎だったわけです。

そして、白洲次郎をドラマ化された鈴木さんと大友さんが、次に坂本龍馬を手がけられるというのは、何か共通する思いがあるのではないかと思えてなりません。

すずき　けい
一九六二年東京生まれ。東大法学部卒。八六年NHK入局、仙台へ赴任。九〇年、ドラマ部へ。主なプロデュース作品は、連続テレビ小説『ファイト』、土曜ドラマ『フルスイング』、ドラマスペシャル『白洲次郎』（二〇〇九年芸術祭参加作品）。そして今回、二〇一〇年大河ドラマ『龍馬伝』を手がける。

きた　やすとし
一九六〇年、名古屋生まれ。東京大学法学部卒業後、富士銀行入行。富士証券投資戦略部長、みずほ証券財務開発部長等を歴任し、二〇〇八年、みずほ証券退職。本格的な作家活動に入る。『白洲次郎　占領を背負った男』『吉田茂　ポピュリズムに背を向けて』（以上講談社）『同行二人　松下幸之助と歩む旅』（PHP研究所）ほか著書多数。

坂本龍馬（国立国会図書館蔵）

鈴木　今回の大河ドラマを担当することが決まったのは一昨年の夏、それこそ『白洲次郎』の撮影が間近に迫っていろいろ準備をしていた頃です。ちょうど社会保険庁の年金記録問題が騒がれていたときで、世の中は国のシステムが信じられなくなり、国に対する信頼感が揺らいでいたときでした。

　そういうなかで、何かある指針になってくれるような人、生き方の参考になる人というのにぼく自身興味があったし、白洲次郎はその意味でぴったりだったんです。

　考えてみると幕末という時代も、幕藩体制が崩壊しつつあり、まさに世情騒然、そういうときに坂本龍馬というヒーローが現れた。あまり表舞台には立たず、ひとり国難に立ち向かったという意味で、いま北さんがおっしゃったように、坂本龍馬と白洲次郎はぼくのなかでは非常に通じるものがあったんです。

北　去年、グリーンスパン（前FRB議長）がいまの大不況を「百年に一度の〝tsunami〟である」と表現しましたが、私は日本の国民に対して、百年に一度のtsunamiくらいであわてるんじゃない、というメッセージを出したいと思っています。

　日本は建国以来二千年、何回か大きな国難に直面しました。古代までさかのぼれば白村江の戦いがあり、元寇があり、その次にきたのが明治維新。植民地化されるかもしれないというまさに国家存亡の危機ですよね。アヘン戦争のあと列強にいいように食い荒らされてしまった中国のようになるかもしれないという危機感の中、このままではいけないという思いで坂本龍馬たち若者が立ち上がった。

　明治維新においても敗戦においても、これまでの我が国は、亡国の危機に直面するたびに「俺がやらねば」という坂本龍馬や白洲次郎のような人間が出てきた。そこに、ぼくは日本の救いを見るわけです。国難にあって、こういう人物が出てくる素地をこの国が持っているということ。このことにぼくは震えるほど感動するんです。

　最近は「歴女」のみなさんの貢献もあってか、未曽有の歴史ブームです。戦国時代の武田信玄や上杉謙信、あるいはその後の信長・秀吉・家康のような、英雄たちがぶつかりあう時代もダイナミックで大いに興味をそそられますが、明治維新のほうが、若者たちをより血沸き肉踊らせるのではないでしょうか。

　おそらくそれは、維新の回天を担う志士たちが一国一城の主などではなく、さしたる社会的地位もない下級武士の出身で、何より二十代や三十代だったことにあるのでしょう。

吉田首相の特使として訪米。羽田空港で記者団に囲まれる白洲次郎　昭和25年（1950）　写真：毎日新聞社

　失うものも何もない若者たちがこの国を何とかしようと立ち上がって、本当になんとかなった。これはすごいドラマですよ。こういう社会である限り、この国は何年に一度の〝tsunami〟が押し寄せてこようと、何度でも立ち上がることができる。そんなメッセージを私は伝えたいんです。

鈴木　まったく同感ですね。

新たな龍馬像

北　今回の『龍馬伝』でとくに私が興味を持つのは、岩崎弥太郎にもスポットライトを当てていらっしゃることです。かつてNHK大河ドラマで取り上げた司馬遼太郎原作の『竜馬がゆく』（一九六八年放送）とは、そこのところが大きく違う。〝鈴木版〟龍馬は、『竜馬がゆく』とは異なる物語を紡（つむ）いでいこうとしていらっしゃるのではないか。その見どころを、キャスティングも含めておうかがいしたいと思います。

鈴木　とにかく司馬先生の『竜馬がゆく』が偉大すぎて……。四十年前の大河ドラマは北大路欣也さん主演で制作しましたが、ただ、『竜馬がゆく』はあくまであの時代のヒット作品だった。右肩上がりの高度経済成長のなかで、日本人がシンプルに未来を信じて前に進んでいた時代の旗振り役のような形で龍馬がいたんです。しかし、あの龍馬は、この複雑な時代ではそのまま単純には通用しない、あの龍馬をもう一度描いても共感は得られないだろうなと考えました。

　ぼく自身、先ほど言ったようなことで龍馬をやりたかったものですから、『竜馬がゆく』とは違う切り口を

探さなければいけない。そこで思いついたのが岩崎弥太郎だったんです。

岩崎は、長崎時代は海援隊の経理番みたいなことをやっていましたが、実は、それ以前は龍馬との接点はそれほどあるわけではない。けれどもそこをフィクションにして、岩崎弥太郎から見た龍馬を描くことによって、言ってみれば司馬さんの作り上げた偉大な龍馬像から自由になりたかったんです。

司馬さんの龍馬像というのは非常に堂々としていて男らしくて、しかし、ともすると最初からやや出来上がりすぎている感じがなきにしもあらずです。「わしは自由じゃ」とか言って、みんなのなかにどんどん入り込んでいって、誰とでも腹を割って話せる。最初から大物感が漂っています。ですから、そうではない龍馬像――先ほど北さんが「下の層から出てきた」っておっしゃいましたけど、身分的なことだけじゃなくて、何も持っていない、本当に無力な若者がどんどん大きく成長して、いわゆる「坂本龍馬」になっていく、そういう話をシンプルにやるというのが、実はいまの時代に共感を得る坂本龍馬になるんじゃないか。そこが今回のぼくらの挑戦といえますね。

ただ、最初は何者でもない一人の若者を描こうとすると、キャスティングがとても大きな要素になってきます。本当になんでもない人がやってしまうとなんでもない話になってしまって、少なくとも前半はドラマがもたない恐れが出てくる。

そこで、普通の俳優さんにはないスター性とか、普通のことをやっていても普通に見えない人ということで、脚本の福田靖さんが『ガリレオ』というドラマをやっていたせいもあるんですけど、福山雅治さんがかなり最初の段階からイメージとしてありました。あの人は非常に男っぽい人なんですよ、実はね。

ただ、それをまだあまり見せていない。それに本来ミュージシャンだし、カメラマンという一面もあって、オリンピックを撮りに行ったりしている。そういう底知れない深さとか、本物性がすごく感じられる人で、そのパワーと、それから人気ですね、そのへんをうまくこの大河ドラマの新しさに組み込んでいけないかなという期待があって、だめもとで話を持っていって、でも粘りに粘って口説き落としました。

北 坂本龍馬が現代人に広く受け入れられるだろうと思うのは、実は彼は平和主義者なんですね、血を流すことが大嫌い。たとえば武市半平太を死罪に追いやった後藤象二郎を海援隊の連中が斬りに行こうとしたときだって、後藤は生かしておいてわれわれのいいように使ったほうが半平太も喜ぶんじゃないかと諌めていますし、饅頭屋長次郎、つまり近藤長次郎が切腹に追い込まれたときも、自分がいたらこんなことはさせなかったのに、と悔やんでいる。あの頃は、何かといえば切腹とか天誅だということになるわけだけど、彼はものごとを平和的に進めていくことを自らのプリンシプルにしています。

それが凝縮されているのが大政奉還でしょう。これこそまさに坂本龍馬の平和主義の結実だと思います。

薩長同盟の次は倒幕だと力瘤をみせていた西郷隆盛や桂小五郎はおそらくズルッとズッコケたでしょう。ある意味、薩摩と長州を裏切ったわけですが、坂本龍馬はおそらく、幕府との内戦で焦土となる日本、恨みや憎しみを国民同士が持ち続ける日本を見たくなかったのではないでしょうか。

龍馬の外交感覚は、現在の我々が手本にしたいものだと思えてなりません。

弥太郎の「屈折」

北 私はドラマの中で岩崎弥太郎を坂本龍馬と一緒に描くのはすごく難しいことだと思っています。彼は非常に屈折しているからです。

坂本龍馬の家は郷士とはいえ大金持ちです。脱藩したって食っていける、くらいの気持ちだったんじゃないですか、龍馬は。それに比べると、岩崎家は郷士の株も売ってしまった地下浪人の家です。七人家族で「傘一本、手ぬぐい二本で暮していた」と言われているほど貧乏だった。

だから彼は同じ土佐藩の中でも、後に武市半平太たちに暗殺される吉田東洋や、その暗殺の責任を追及して武市を切腹に追い込む後藤象二郎のような藩上層部に取り入り、坂本龍馬の仲間たちからすれば許しがたい存在となっていくわけです。

私には岩崎弥太郎と、薩摩出身の大警視、川路利良がオーバーラップするんですよ。

川路も郷士の出身で、上士や下士と喧嘩ばかりしていた。その屈折した思いはしだいに薩摩藩に対する憎しみとなっていきます。

西南戦争の直前、西郷隆盛を擁する私学校にスパイを送り込んで西郷暗殺をも企んだのは、薩摩に対する最高の裏切り行為です。そこにはヒエラルキーの下でいつも苦しんでいた川路の心の痛みがあったと思うんです。岩崎もそうですが、だいたいはるか上にいる人間よりも、少し上

にいる人間のほうが憎いんだと思うんですね、人間って。

だから岩崎弥太郎はむしろ土佐勤皇党を弾圧した山内容堂と後藤象二郎の側についたんじゃないでしょうか。

それでも龍馬は岩崎を一旦は許します。むしろその能力の高さを評価し、後に土佐藩の海産物の販売会社である土佐商会の長崎出張所長になった岩崎に、海援隊の経理係のような役割を担ってもらうのです。

でも私には、その龍馬が暗殺されたとき、岩崎は彼の死を悼んではいなかっただろうと思えてなりません。これにはある事情があります。

長崎で水夫二人が殺された例のイカロス号事件のあと、岩崎は、犯人は海援隊だと信じ込んでいるパークス英国公使との折衝を任されるわけですが、犯人逃亡の恐れがあるから薩摩への船（武器弾薬を積んだ「横笛」）を出航させるなと言われ、岩崎も「わかった」と返事していたにもかかわらず、勝手に出航してしまったため、パークスは激怒します。

土佐の奉行所も、犯人は海援隊でも土佐商会でもないと納得していたのですが、パークスとの約束を破ったことへの謝罪を求めてきます。ここで岩崎は頭を下げるわけです。ところが海援隊はふざけるなと激しく抵抗し、おかまいなしにしてしまう。

そして岩崎に「お前にはプライドがないのか」と批判が集まりました。この時、龍馬は、「しょせん彼は兵法も戦術もわかっていない道学先生だ」と、彼には珍しく、腰ぬけ呼ばわりして批判するのです。

龍馬からすると、やはりあいつは吉田東洋や後藤象二郎にごまをすった姑息な奴だという思いがよみがえってくる。一方の岩崎からすれば、結局龍馬のような金持ちの郷士にはおれの気持ちなどわかるまいという思いがこみ上げてくる。これはなかなか複雑な人間関係です。

つまり、この二人をドラマにする場合、あくまで爽快な坂本龍馬と、屈折している岩崎弥太郎を同時に描かねばならない。しかし、現在の日本の閉塞感を考えると、むしろ岩崎弥太郎のほうに自分を投影して共感する若者もいるんではないかと思いますね。欲張りな企画で、かつ難しい題材ですが、是非頑張っていただきたい。

鈴木 なるほど、そうですね。

北 プレッシャーをかけてしまった（笑）。

モーツァルトとサリエリ

鈴木 いや、実はそこが今回のミソだと思っていて、ぼくら、最初に龍馬と弥太郎は『アマデウス』のモーツァルトとアントニオ・サリエリだと言っていたんです。

北 ああ、それはいい視点ですね。

鈴木 『アマデウス』はすばらしい映画で、サリエリはモーツァルトの才能を憎んで、うらやんで、でもいちばんその才能をわかっていたという、あの映画で描かれた関係性が龍馬と弥太郎についても当てはまると思うんですよね。あくまでフィクションですけど、基本的には身分も裕福さもずいぶん違うモーツァルトとサリエリが、どこかでそれに憧れたり、妬ましく思ったり、そこのところがドラマティックで面白い。

吉田東洋が武市半平太たちによって暗殺されたときに、ちょうど脱藩していた龍馬が犯人じゃないかと疑われ、弥太郎が土佐藩に命じられて龍馬を追いかけたという話もありますね。龍馬を追いかける弥太郎みたいな、そういう構造自体にこれまでとは違う面白さがあるのではないかと……。

単純にいうと、岩崎弥太郎は秀吉のパターンで描くのがふつうなんですよ。『秀吉』という大河ドラマもありましたけど、いちばん身分の低い人間が「でっかい夢を持つんじゃ」と言って、どんどん出世していく。それがいちばんわかりやすい大河ドラマの主役のタイプなんです。岩崎弥太郎には、そういう要素があるんですね。そういう意味では感情移入しやすい。ところが、北さんがおっしゃったように、彼には屈折したドロドロしたものがあります。ですから、そこに合わせ鏡のように龍馬をおくことによって、清濁両方を描ける。でも、そこをうまくやらないとどっちも中途半端になってしまうので、やはりやるところは徹底的にやって、弥太郎も泥にまみれさせなければいけない。

だから、いまいちばん頭を痛めているのが最後の龍馬の暗殺犯を誰にするかということなんです。実行犯は佐々木只三郎だって言われていますけど、では黒幕はだれだったのかというと、実は龍馬に関する本がこれだけたくさんあっても、いまだにそれがはっきりしていない。薩摩藩や西郷にだって動機としては十分にあるわけで、それに紀州説あり、新選組説あり、誰が黒幕であってもおかしくない。でも、もっと言えば岩崎弥太郎という可能性だってある。

北 出た！ まさかそうくるとは（笑）。

矛盾したことを言うようですが、岩崎弥太郎の土佐藩への思いは、憎

しみだけでなく、郷愁をも含んでいたのではないかと思います。自分の故郷を憎み切れる人などそうはいないでしょうからね。三菱のマークを考えた際、彼のルーツと伝わっている武田家の武田菱と土佐藩の三つ柏の紋章を合わせて、今も使われている三菱のスリーダイヤモンドにしたわけです。これは彼のなかにある土佐への思いの表れだと思いますね。おそらく龍馬に関しても、憎み切れなかったのではないですか。

鈴木　いろは丸事件で龍馬が紀州藩からぶんどった賠償金八万三千両の行方というのもはっきりしない。それが実は弥太郎が三菱を作る元手になったんじゃないかというのはけっこう根強く言われている話です。

　坂本龍馬という光り輝く人物に対して、暗い恨みやマイナス意識を持っていた人たちって、けっこういるんですよね。その純粋無垢な龍馬と、その周囲にいる人たちや各藩のドロドロとした思惑というのが、このドラマのクライマックスになっていく。そこはきれいごとですまさずに描きたいと思っています。その意味で、今回、岩崎弥太郎を演じる香川照之さんが、ぜひこの役をやりたいと言ってくれたのは心強いですね。香川さんは、ぼくが演出をした『利家とまつ』では秀吉役をお願いしたんですが。

北　香川さんは、秀吉の屈折したいやらしさ、二重人格をみごとに演じていましたね。それが香川さんの役者としてのすごさだと思う。フッと冷たい表情もできるし、ものすごく芯の強さを表現できる役者ですから、本当にいいキャスティングだと思いますよ。

鈴木　いまいちばん脂ののった、日本を代表する名俳優ですよね。限りないポテンシャルを持っているスーパースターの福山さんと、日本有数の役者である香川さんとがいい化学反応を起こしていくというのが、やはり今回の狙いとしてはありますね。福山さんの魅力をいっそう光らせるためにも香川さんが必要だった。

龍馬と四人のヒロイン

北　大河ドラマには女性が欠かせませんが、とくに坂本龍馬の場合はいろいろ重要な女性が出てきますね。お龍をはじめ、墓碑に「坂本龍馬室」と彫らせている千葉佐那、それから平井収二郎の妹の平井加尾。お龍さんは海援隊からはけっこう嫌われていたらしいけれど、寺田屋で新選組の襲撃を裸で知らせにきたのは一つのクライマックスでしょうし、二人で薩摩にハネムーンに行ったというのもいい話ですが、さて、最後のシーンをどうするのか。龍馬が暗殺されたときにお龍さんは豪商の伊藤助太夫のところにいましたね。彼の死をお龍さんがどうやって知るように描くか。たぶんこのシーンは間違いなく撮られると思うんですが、お龍さんの驚きをどうとらえるのか、これは相当難しいと思うんですよ（笑）。大河ドラマの『翔ぶが如く』だったかどうか忘れましたけど、第六感でお龍さんが気づいて「龍馬！」と叫ぶシーンで終わっていたこともありました……。

NHK大河ドラマ『龍馬伝』では岩崎弥太郎（手前：香川照之）から見た龍馬（福山雅治）が描かれる　写真：NHK

『龍馬伝』で広末涼子が演じる平井加尾　写真：NHK

鈴木　女性の話でいうと、今回、ぼくらは「四人のヒロイン」という言い方をしているんです。いまお話にあった土佐の幼なじみの平井加尾、江戸の千葉道場の千葉佐那、それからお龍さんがいて、もう一人、実はいままであまり出てこなかったんですけど、お元という長崎丸山の芸妓がいます。後藤象二郎と仲直りした歴史的な清風亭での会談のとき、その場にいてもおかしくないと言われている女性です。

　で、ヒロインが四人もいるというのは、坂本龍馬は言ってみれば浮気者なんですけど、でも、実は坂本龍馬っていうキャラクターだから、もっと言うと福山雅治が演じればいやみでなくそれがたぶんできるだろうなという計算があって、今回、この四人のヒロインで見せ場をつくりたいと思っています。

　実はお龍さんにしても、『竜馬がゆく』のイメージが本当に強くって、しかも『竜馬がゆく』には加尾のかわりにお田鶴様という女性が出てきたりします。つまり、あの小説がいかにフィクションかということですよ。でも、皆さんそうは思っていらっしゃらない。坂本龍馬って本当にああい

う人だったんだろうと、史実としてとらえているんです。あのすばらしいフィクションと戦っていくには、ぼくたちも常識にとらわれずに新しいフィクションを作っていくしかない。それが『龍馬伝』の「伝」にこめた部分で、司馬さんから自由になって、いかに新しい物語をエンターテインメントとして提示していけるか、そのへんが一つの鍵かな、と思っているんですけどね。

北 龍馬を取り巻く女性たちって、宝塚系の女性ばかりですね。お龍も男まさりの女性だし、千葉佐那だって剣道の達人だった。龍馬との最初の出会いからして、立ち合うたびに負けてしまう華奢だが強い剣士がいるので、足を蹴って倒し、面をはぎとってみたら千葉佐那だったという伝説が残っているくらい。平井加尾にしたって男装させようとしていたとも言われる。「大小二本と袴を用意して来い」と彼女に宛てた龍馬の手紙が残っています。凛々しい女性が何人も登場するドラマになりますね。

史実の意味

鈴木 史実をどう扱うかというのも、ドラマを作るときには本当に難しいんですね。龍馬の手紙はわかっているだけで百四十通くらい残っていますが、そこに平井加尾に宛てた手紙もある。でも、あの手紙の意味って、実は本当にわからないんですよ。つまり、龍馬がどういう意味で男の袴と大小を用意しておけって言ったのか。自分が脱藩した時のために用意しておけということなのか、あるいは「加尾、お前も尊王攘夷のなかに身を投じて来い」という意味だという説もある。史実ははっきりしていても、それをどう解釈するか、どういう意味にとるかで、様相が違ってくる。坂本龍馬の場合も、わからないことが意外に多いんですよ。

薩長同盟締結という龍馬で最も有名な話にしても、桂小五郎に頼まれて、坂本龍馬が書面に朱筆で裏書きをしている。その現物が残っていますけどね。あとで西郷や薩摩が「こんなことはなかった」と言わないように、内容に間違いがないことを龍馬に保証させている。

でも、ちょっと待った。龍馬の裏書きにいったいどういう効力があったんでしょう。だって、当時の龍馬は脱藩していて、ただの浪人にすぎない。いかにいろいろな有力者を知っているとしても、そういう人間の裏書きがいったい何の保証になるのかっていう疑問があります。専門家の方にいろいろ聞いてみたんですけど、あんまり納得できる回答がなかった。史実の解釈って本当にいっぱいあるから、坂本龍馬像ってわかっているようで実はあまりわかっていないとも言えるんですね。だから作りがいがあるというか、わかっていないことはぼくらなりに解釈してしまってもいいんじゃないか。逆にそう考えないと、ぼくら史実の重みにつぶされちゃうところがあります。ただでさえ大河ドラマは「教科書がわりにしています」という視聴者の方もいらっしゃるし。

実は、毎週放送が終わって月曜になると、あそこが間違っていたとかいう抗議の手紙やメールが山ほどくるんです(笑)。それこそ北さんのようにくわしい方が、全国にものすごくいらっしゃるわけですよ。ぼくら、それに対して「すみません、知りませんでした」と素直にあやまったり、「いや、そこはちょっとゆずれない」とか「いや、ここはフィクションです」とか反論したり。

北 「俺の龍馬」とか思っている人がいるから(笑)。

鈴木 「龍馬先生」とかおっしゃる方が(笑)。このあいだも実は、高知県で開催された龍馬社中の全国大会というのに行ったんですよ。脚本の福田さんが講演をして、ぼくがカバン持ちでついていったんですけど、ハーレーダヴィッドソンを三十台くらい連ねて来てくださった龍馬ファンクラブの人たちがいたり、着物を着て龍馬のような格好をした人も二十人くらい会場のホテルのロビーにいるんですよ。

北 コスプレまであるわけだ(笑)。

鈴木 そういう熱狂的な人たちが、でも、たぶんみんな違う龍馬像を頭のなかに描いているわけですね。ベースは司馬さんの『竜馬がゆく』なのかもしれないけれど、でも一人一人が全然違う龍馬像を持っている。だから、あるところでぼくら諦めたんです。その人たち全員に満足してもらうのはなかなか難しいので、そこはぼくたちが面白いエンターテインメントとして、ある部分フィクションです、というふうに割り切って作っていくしかないなと。そこに突破口があるとは思っているんですけどね。

薩長同盟は高度な経済行為

北 ぼくのようなビジネスマンをやっていた人間から見ると、薩長同盟というのは、突き詰めれば信用状取引とスワップ取引に当たるんですよ。長州征伐の後、幕府は外国の貿易商に長州に武器を売らないよう徹底していました。一方の薩摩は、約束していた長州との会合を急に反故にしたことで、彼らとの関係改善を

したいと考えている。また戦争に備えて兵糧米をほしがってもいた。で、薩長同盟を画策していた坂本龍馬はスワップ取引を思いつくんです。

つまり、長崎のグラバー商会から薩摩の名義で武器を購入して長州に送り、その見返りに長州は薩摩に米を送ることにした。武器の購入にあたって長州が持っていったのが薩摩側のこの人間に武器を売ってやってくれという趣旨の手紙、これは貿易の世界で言う信用状ですよ。レター・オブ・クレジットですね。この信用状を添付して、井上聞多(馨)と伊藤博文がグラバーから小銃と船を買った。まあ結局、タイムラグがあって薩摩は米を受け取らなかったけれども、しかし、買えないはずのものが買えたのは、米と武器とのスワップ取引だったからだし、長州が買えないものを薩摩の信用をつけて買わせたというのは、これは非常に高度な金融取引なんですよ。

つまり、薩長同盟というのは、龍馬のビジネスセンスが横溢しているきわめて高度な戦略による同盟だったんです。

鈴木 しかし、あれほど仲の悪かった薩摩と長州を結びつけたというのは奇跡に近いですよね。

先ほど龍馬の平和主義ということを北さんはおっしゃっていましたけど、ぼくは一つには龍馬の持っている柔軟さだと思います。あれだけ誰もが尊王攘夷思想で沸き立っているなかで、一人だけ「違うなあ」って思える、その柔らかさ。それでどんどん人と会って自分の栄養分にして、コネクションを作って動いていく。それはとてつもない懐の深さでもあるんですけど、あの柔らかさを、今回ぼくらがやる坂本龍馬で表現できればいいなあと思っています。

北 私は「日本人の美徳は〝恕す〟文化だ」と言っています。坂本龍馬は、憎んで当然の後藤象二郎を恕した。まあ言ってみたら大政奉還も、この国を危機に陥らせた幕府を最終的には恕そうという考え方なわけですよ。なんとか相手の立場に立って受け入れてあげる、そういう美徳を彼は持っていた。西郷隆盛にもそういうところがあります。薩摩屋敷に火をつけ、最後まで新政府軍と戦った庄内藩を西郷隆盛は恕した。神経質な桂小五郎は、そうしたところに少々欠けるところがあったと思うけど(笑)、龍馬や西郷の度量の大きさが、過去のことをあれこれ言い始めたらきりがないから、前を見ながら今後をいい方向にもっていくにはどうしたらいいかを考えることを可能にしたのです。

これは実はビジネスマンの考え方なんですよ。ビジネスは信用が大事とはいえ、過去にこだわっていたら商売などできません。龍馬の生き方は、サラリーマン諸氏にも絶対参考になるはずです。

「白洲次郎と坂本龍馬、現代の道しるべとなる人を描いていきたい」

もし龍馬が生きていたら

北 これは誰もが興味を持つところだと思いますが、もし坂本龍馬が生きていたらどうなっていたと鈴木さんはお考えですか。

鈴木 もしかすると、龍馬は意外と歴史の表面に出なかったかもしれない。政府の高官になるとか、そういうことに興味がなかったことはたぶん間違いないでしょう。おそらく、経済的行為のほうにいったんだろうなという気がしますね。

孫正義さんが海援隊の旗をソフトバンクの旗にしたというのは有名な話ですけれど、それっぽい匂いというか、何かベンチャー的な、大きなことをやったんじゃないかと漠然と思います。ある意味では、そういう龍馬の夢を岩崎弥太郎が受け継いで三菱を作ったという考え方もできる。

北 ぼくが言いたいのはそこなんです。つまり、龍馬が生きていたら三菱はないんじゃないか(笑)。まさに大村益次郎が死んだから山縣有朋が出たように、坂本龍馬が死んだから岩崎弥太郎が大三菱を作ることができたんじゃないかとも思うんです。

鈴木 まあ、そう言うと三菱関係者の方は「違う」と(笑)、龍馬と関係なく、岩崎弥太郎は独自にそういうビジョンを持っていたんだとおっしゃるんですけどね。いずれにしろ、ある部分、龍馬と弥太郎の目指していた方向性は似ていたんじゃないかという気はします。だからぼくらのドラマでは、龍馬が果たせなかった夢をある形で実現していったのは岩崎弥太郎だっていうようなことになっていくと思うんですけどね。

つまり、龍馬が死んで、『龍馬伝』

というドラマは終わりますけど、じつは岩崎弥太郎のドラマはそこから始まるんです。弥太郎はその後、後藤象二郎と連携しながら非常に短い期間に財を成しているんですよ。ちょっと見えにくいブラックな部分もありますが、魅力的なキャラクターではありますね。岩崎弥太郎だけでもドラマができるなって思ったくらいです。死ぬときも二升くらい吐いて、胃がんでもがくように死んでいきます。壮絶な人生ですよね。

北 岩崎弥太郎ってとても冷静な人間なんです。なぜかと言うと、ビジネスマンって冷静なところがないとだめで、情に流されたらろくなことにならない。その一つの証拠として、後藤象二郎が、自分の経営していた炭鉱を買ってくれないかと頼んだときに、彼は断っています。最終的にはダンピングして引き取るんですけれども。あれだけ後藤象二郎に世話になっていながら、ビジネスライクに断れる。自分のスタイルを貫く人なんですよね。坂本龍馬って情に流されるから、ビジネスマンとしてはどうだったかなとも思うんです。

完結した人生だった

鈴木 〝弥太郎伝〟は龍馬とはまた違うドラマになる。

北 でも、岩崎弥太郎ってすごく成長した人だと思うんですよ。というのは、さきほど申し上げましたように極貧に生まれて、さまざまな欲望を抑えて生きてきたのが、御用金百両を手にして長崎へ行ったとたん、丸山でワーッと遊んでしまう。つまり、彼はあのときは抑圧されたものを抑えきれない、歯止めが効かない人間だったわけです。それがやがては鉄の意志を持つ人間に成長していく。その過程というのも今回のドラマの見所ですね。

鈴木 もちろんそうですね。彼は何度も挫折しながら、少しずつ上昇していく。

北 坂本龍馬の銅像が桂浜で海を見つめているように、岩崎弥太郎も海に可能性を見出したわけですよ。やはりこれからは海外だ、貿易だと。何か白洲次郎みたいですね(笑)。

ところが、三菱はそれほどトントン拍子に大きくなったわけじゃない。彼はずっと苦労のしどおしでした。ついには胃がんで苦しみ抜いて亡くなったし。彼は生きている間はそんなにいい目を見ていない。最高に幸せだったのは、御用金の百両を手にして思わずワーッと使ってしまった、あの瞬間だけだったんじゃないですか(笑)。

鈴木 あのときは楽しかったでしょうね、長崎で飲めや歌えや(笑)。

北 もし龍馬が生きていたら、ということで言えば、実は、龍馬は薩摩の五代才助(友厚)と非常に仲がいいんですよ。五代は大阪を近代商業都市にした最大の功労者で、大阪証券取引所の前にいまも銅像があります。薩摩出身ですからどうしても政商と言われ、黒田清隆の開拓使官有物払い下げ事件のときには問題になりました。

私は、坂本龍馬は海外にも出ていっただろうけれど、まず北海道開拓に行ったんじゃないかと思うんですよ。彼は蝦夷地にものすごく関心を持っていましたから。すると何が起こるかというと、開拓使官有物払い下げ問題で批判を浴びるのは五代商会じゃなくて海援隊になっていたんじゃないかと(笑)。

それはともかく、坂本龍馬がもし明治維新後まで生きていたらと想像するのは面白いけれども、途半ばで暗殺されたのは、それはそれで完結した人生だったと思うんです。龍馬の死は「惜しいな」とは思うけれど、マリリン・モンローだってマイケル・ジャクソンだってそうだけれど、あれはあれでやはり完結した人生なんだと思います。

司馬先生は『竜馬がゆく』の最後、「人は死なねばならない」、「これで主題はつきた」と書いておられます。まったくそのとおりです。大政奉還は、結局倒幕に向かってしまったから、後で振り返ればあんまり意味がなかった。彼のいちばんの業績は、まさに薩長同盟を築いたことにある。あれだけ険悪な状況にあった薩長をもう一度結びつけたのは、やはりすごいことですよ。

天はここで、最高の「人間力」を持った坂本龍馬という人物にこの国の回天を託したんです。それが彼の人生だったと思う。

鈴木 そうかもしれませんね。薩長を結びつけた功績と意義はそれほど大きかった。

北 若者たちに言いたいのは、あのときの坂本龍馬はまだ三十そこそこだったということです。若い人にだって、その気になればこれだけのことができるんだと。

それにもう一人、何も持たないところから大三菱を築き上げた岩崎弥太郎のような人物がいる。龍馬と弥太郎はそれぞれ別の意味で若者に勇気や希望を与えられる存在だと思いますね。

鈴木 『白洲次郎』同様、危機に立ち向かう人物像として、ぜひ見てください(笑)。

撮影 佐藤英明